



滝野 隆浩の
掃石記

100年後、墓は森に

前回触れた大阪・能勢妙見山の「循環葬」を見たあと、大阪北摂霊園に足を延ばした。車で20分ほど。ここに「ドイツ型樹木葬墓地」があるという。

総面積98・3畳の広大な靈園である。千里ニュータウンの新住民などの墓地需要に対応するため1973年に開園した。人口増の時代に墓域は拡大してきたが、一般墓地の新規貸付数はしだいに減り始める。2011年に「返還」数が「新規」を逆転。そこで17年に承継者不要の合葬墓、20年には使用期間を30年に限定した「小さなお墓」を提供し始める。時代の変化、家族形態の変容に機敏に対応してきた靈園なのだ。

そうして21年6月、「木もれびと星の里」が誕生する。「関西初、ドイツ型樹木葬墓地」をうたい、パンフレットには「墓じまい不要／初期費用のみでOK」とある。

「ドイツ型」とはどんな形態なのか。日本でも樹木葬墓地は人気だが、定義はない。バラをたくさん植えた庭園式や、中には大きな樹木が1本あるだけのところもある。一方、森林天国ドイツでは森林保護が大前提で、森を弔いの場として提供することで保護費を貰おうという取り組み。「童話の舞台、メルヘンの森でお墓参りを」などと、観光資源としても活用される。新墓地の監修をした北海道大の上田裕文・准教授は「ドイツは森をお墓にしたのに対し、日本はお墓を森っぽくした」と指摘する。

運営する公益財団法人「大阪府都市整備促進センター」のスタッフに案内してもらいう。斜面に「木だち」(占有用)、「木もれび」(共有用)の区域があり、使用希望者はコナラ、コブシなど好きな木を選ぶ。木の根元に深さ50センチほどの穴を掘り、袋に入れた遺骨が埋められる。23種の森の木がそのまま墓標。サクラやモミジは人気が高く抽選になるという。さらに森の中の埋蔵場所を特定しない「天の川」という合葬墓もある。生前予約、府外からの申し込みも可能で、40～50代の応募が多いという。これまでに271件、貸し付けられた。

驚くべきはパンフレットの記述である。「2121年3月31日で使用期間は終了」「埋蔵されたご遺骨は、山林とともに自然遷移する(土に還っていく)ことに」。そう、100年後、墓は森になる。故人はそのまま森で眠る。

(専門編集委員)